

兵庫県南部地震

震災犠牲者慰霊を齋行

激しい「浄化」作用と受け止め

世界救世教

世界救世教（川合輝明総長、静岡県熱海市）は十日、「阪神大震災犠牲者特別慰霊祭」および恒例の「光明祭」を神奈川県箱根町の神仙郷光明神殿で齋行、被災地の信徒はじめ五千人が参拝し、犠牲者の冥福を祈った。この中で岡田陽一教主は、今回の震災が世界経綸の進展に伴う激しい「浄化」作用だとの見方を示した。また、被災信徒六人が震災で経験した数々の「奇蹟」を紹介するとともに、復興に向けて力強い決意を表明した。

兵庫県南部地震は被災地に住む救世教信徒四千人にも深刻な打撃を与え、そのうち十六人が帰幽、六百軒の住宅が全壊・半壊などの被害を受けた。教団では大阪府箕面市の「MOA北大阪」に地震災害の対策本部事務局を設置し、全国から派遣された専従者らが救援活動に従事。一月三十・三十一日には、川合総長、志賀政雄責任役員らが被災地を見舞い、神戸市や淡路島の教団拠点、西宮の信徒家庭などを慰問した。

岡田茂吉教祖の命日にあたる十日はまず、教祖の遺徳を偲ぶ光明祭が営まれ、岡田陽一教主による「光明祭祝詞」では、「阪神大震災を大浄化と受け止め、信徒一丸となって試練を乗り越える」ことを誓った。

続く特別慰霊祭では、教主が犠牲者を悼んで「阪神大震災慰霊祭祭詞」を奏上し、一刻も早い被災地の復興を希求。次いで教主、総長のほか、大野慎一MOA関西本部代表ら被災地の信徒が玉串奉奠を行なった。さらに地上天国が形作られていく様を描写した善言讃詞を奏上、「幽（かくり）世に入りし汝（なれ）はも御救ひに／ひた励（いそし）めよ力限りに」など教祖作の救霊歌三首を参拝者全員で奉唱して犠牲者を追悼した。教主の手かざしによる浄霊のあと教祖の「御教え」が拝読された。

このあと陽一教主が「お言葉」を述べた。先年来の教団改革の成果を強調したうえで、「箱根聖地に地上天国建設を進める明主様のご経綸の礎が確立した。それに伴い、浄化も激しくなっている。阪神大震災はそのことを示して余りある」との認識を示した。

また、震災の被害が最小限に済むなど「ブランチャー（信徒）が素晴らしい奇蹟を頂いている」ことに触れ、「奇蹟に関する話を聞いていると涙がこみ上げてくる。そして、大きな浄化を乗り越えようと努力するブランチャーの皆さんの姿に感動している。一日も早い被災地の復興を願う」と被災信徒を激励した。

被災信徒が語る「奇蹟」と決意

引き続き、被災信徒六人が大震災で経験した「奇蹟」や復興に向けての決意を語り、大野関西本部代表はじめ脇本千代子（神戸市垂水区）、森壽茂（川西市）、福本幸子（淡路島）、安井俊彦神戸市議会議員、平野和豊（宝塚市）の各氏が登壇した。

現地震災対策本部責任者の大野代表は一月三十・三十一日の総長慰問や、各地の専従者の救援活動に謝意を表明。さらに「明主之御神（＝教祖の神名）の素晴らしい証が現われた」として、被災信徒が頂いた「奇蹟」の数々を紹介した。

その上で、▽大震災を「御教え」の中で捉え直す▽被災者に浄霊を施す▽救世教独自の生け花・MOA山月を通

して教祖の教えを伝えるーなどの方針を示し、これまでの活動でブランチ（信徒家庭）中心の体制の大切さに改めて気づいた、と語った。特にMOA山月の効果が目ざましく、花を生けることで殺伐とした雰囲気や和やかになった避難所も多いとした。

脇本さん宅では、地震発生の際、就寝中の義母にタンスが倒れかかってきたが、先に倒れた仏壇との間に隙間ができ、義母は危うく難を逃れた。また、周辺地域が地震によって断水したのに、自宅だけは水が出るという「奇蹟」を経験した。

脇本さんは一月三十日に神戸で川合総長の指導を受け、地域でのボランティア活動を決意。避難所になっている神楽台小学校（垂水区）で、「明主様にお使い頂く感謝」を含めて救援物資の仕分けや配給に取り組んだ。

また、「花による天国化運動」を願った教祖の教えをよりどころに、紙パックや空き缶に活けた草花を避難所に届けると、物資の不足に不満を訴えていた被災者がボランティアの手伝いを率先するようになった。「救いの力を持つ明主様の花のすごさに驚かされた」と脇本さん。

そして、震災のショックで人々の多くが心に傷を負っている今こそ「明主様の御教えが万人の救いになり、その具体的手だてとしての自然農法や花による救い、日本医術・浄霊が必要なのだと実感する」と言い、「幸いに私たちに明主様から救いの絶対力を与えられている。家族同士が力を合わせ、しっかりとネットワークを組んで立ち上がるならば、世界 災害に強い、明主様のお肉体としての本当の天国の街づくりが許されるものと確信する」と、救世教信徒として震災に立ち向かう決意を披露した。

また、一月二十三日に被災地を見舞った成瀬守重参議院議員も挨拶し、国家による万全の対策とともに、物質の援助だけでなく、救世教の教えである「霊体一致」の形で被災地を救わなければならないと強調。復興に向け、全国のMOA議員に協力を呼びかけたいとした。

川合総長は挨拶の中で、今回の震災を教祖の御教えにある「最後の審判」の型だと受け止めている、と言及。さらに、命を救われた信徒は「超奇蹟」を頂いたのでとし、今後、信徒が進むべき指針を次のように示した。

「明主様の救いは曇りを根本から除去する。その証を関西の被災地の信者が身をもって体験した。震災が救世教が受けた最後の審判である以上、超奇蹟を頂いた信者と苦楽を共にする中で明主様の素晴らしいご守護に応えていきたい。信者は時間を作って現地に足を運び、自然食やMOA山月の活動で“光”を届けてほしい。そして、現地のブランチと一緒に手をかざして浄霊を取り次いでほしい。

これからが復興の第二ラウンド。被災者は心に傷を負っており、救世教の必要性がこれから求められる。災いは曇りが滞積して吹きだしたものである。救世教に課せられた使命は、曇りを取り除き、災いの起こらない都市づくりをすることだ」

また、この日は若手専従者らが聖地の参道で被災地の救援募金を熱心に呼びかけた。

慰霊祭では被災信徒が復興に向けて決意を語った【写真は省略】

「被災同胞に愛の手を」

苑主先頭に救援募金

紫光学苑 全国20カ所で

紫光学苑本部（川上照彦苑主、兵庫県姫路市四郷町）では一月二十四日から同三十一日まで、JR姫路駅前などで兵庫県南部地震の被災者救援の街頭募金を行ない、川上苑主自ら陣頭に立って市民らに協力を呼びかけた。

兵庫県南部地震では同苑本部のある姫路市も震度4を記録。地震発生時はちょうど一月の錬成会の期間中で、川上苑主や多くの信者が本部に滞在していた。

幸い信者や本部の建物などに被害はなく、その後の調査で被災地の信者の無事も確認された。

川上苑主は自宅（宝塚市）が避難勧告地域になるなど被害を受けたが、関東大震災以来の大災害に、「今こそ我々は心を一つにして被災者に愛の手を差しのべる時だ。すべての人は神の子であり、我が親戚であり、我が兄弟姉妹である。力を尽くして救援活動に立ち上がろう」と、自らが先頭に立って救援活動にあたる決意を表明。

これを受けて全国の信者による街頭募金活動がスタートした。

期間中は本部職員や姫路支部婦人部員ら約三十人が、同駅前とその周辺数カ所に分かれ、「寒空の下に耐えて寄り添う同胞に愛の手を－兵庫県南部地震義援金募集」と書かれた幟を立てて懸命に募金をアピール。

川上苑主も「皆さん、私たちの同胞が今日も寒空に耐えて頑張っております。皆さんのあたたかい愛の手を差しおべてください」と、街行く人に合掌しながら善意の寄付を呼びかけた。職員らの声をからしての訴えに反響は大きく、若い学生らも続々と義援金を寄せていた。

一方、本部のほか東京、大阪、静岡、富山などの各支部も全国約二十カ所で募金活動を行なった。寄せられた義援金は各地の新聞社等を通じて被災地に贈られる。

また同苑では二月から看護婦、医師、薬剤師、理容師などの医療ボランティアや一般ボランティアを被災地に派遣している。

合掌して募金を呼びかける川上苑主（中央）【写真は省略】

日本一の産地“復旧”

加盟全18社で生産再開

兵庫県線香協同組合

一月十七日早朝突然発生した兵庫県南部地震は、香の発祥地とされる淡路島にも甚大な被害をもたらした。淡路島津名郡一宮町は、約六百の線香生産業者が集まり、年間生産高約五千トン、売り上げ約百五十億円以上を誇っている。文字通り日本一の線香産地として、同町の重要な基幹産業としての位置を占めている。

同町の中でも、江井地区は、線香生産の創業の地。幕末の嘉永年間、大阪・堺からその技術が伝わり、風があり、冬でも零度以下に気温が下がらないなどの気候条件にも恵まれ、同地区に瞬く間に生産が広がっていった。現在でも、二千人余りが暮らす漁村・江井が、日本の線香の約七割を供給している。

兵庫県線香協同組合（福永稔理事長、事務局＝一宮町商工会館内）は、江井地区を中心に、主な薫物専門店十八社で組織（島外二社を含む）。長い間任意団体であったが、昭和五十五年正式に組合として認められた。同町の線香生産業者のリーダー的役割を果たしているばかりでなく、全国薫物線香組合協議会の重要な推進役を担っている。

今回の地震で、一宮町内でも最も大きな被害を受けたのが郡家地区。同組合加盟店のうち三社が事務所を構えている。社員の死亡をはじめ、建物被害や商品被害など、少なからず打撃を受けた。しかし、同地区から三キロほどしか離れていない江井地区では、まったく被害がなく、組合全体から見ると線香づくりのダメージは問題にならない。すでに、郡家地区の薫寿堂（福永稔社長）、大発（下村桂造社長）、多宝堂（福永寿夫社長）の三社では、線香生産を開始させ、全組合加盟店足並み揃えて、完全復旧を目指している。

福永理事長は「一時は、商品不足が起きるのではとの危惧する声も聞きましたが、消費者に迷惑をかけることなく、線香を供給していくことが私共の使命です」と自信を込めて話す。

また「確かに地震の被害はありました。しかし、これを機会によい方向に軌道修正して、ピンチをチャンスに切り替えていくことが大切」と話している。

同組合では、同じく被災地となった阪神地区へ、組合加盟店から寄せられた三千箱の線香を贈ることを決め、二月九日には被災現地へ向けて発送を済ませた。同組合では「今回の地震で、各方面から組合に温かいお見舞いや支援を頂いた。神戸市などでは、仏具店自体が大きな被害に遭い、消費者が線香を手にいれにくいと聞き、このお見

舞いへのお礼にと線香を贈ることにしました」としている。

組合加盟店では、地震の被害を乗り越えて生産体制に入り、一時も早く正常時に戻したいとピッチを上げている。線香の最盛期を迎える春の彼岸に向けて、流通が始まる三月上旬までには、軌道に乗せたいとしている。

四月には、一昨年に全国薫物線香組合協議会が制定した「お香の日」を迎える。同組合が制定に際して、中心的な役割を果たしてきたこともあり、今年に取り組みに注目が寄せられていた。

被災前までには、すでに四月十五、十六の両日に、開催することを決定していたが、現時点では、リーフレット『お線香のこと』の配布が決められたほか、開催については未定となっている。しかし、昨年が大成功となっただけに、開催を望む声が高まっており、同組合でも、二月中には結論を出したいとしている。

福永理事長は「これを機に、組合がより以上に結束していく前向きな姿勢が鮮明になってきました。一人々々の協力がなければいけないと意を強く持ちました」と話す。今回の地震で、大きなダメージは確かにあったものの、組合として何が大切かを各店が認識を新たに持ったことが、今後の大きな財産となったに違いない。日本一の線香産業が立ち直る日も近い。

一宮町は、行政と線香業界が一体となって「香りの町」宣言を全国に向けて発信。積極的に産業育成と広報活動に取り組んでいる。同町尾崎の淡路香りの館「パルシェ」は、伝統的な香りから現代的なものまで、様々な体験できる施設として、香りの町イメージの核の役割を担っている。近年、同館を訪れる観光客も増えている。

香りの町のイメージの核となっているパルシェ館【写真は省略】
